

## 悪夢の逃避行

北海道 佐藤 栄子

昭和二十年八月十九日、健康な男子は家に残り、老人と女子供は、本土への緊急疎開が樺太庁から命令あり、八月九日ソ連の宣戦布告もあり皆殺しに遭うのではということで、取るものも取り合えず着の身着のまま、町内の人達と発動機船が引く荷物運搬のはしけに乗り込み、珍内から真岡へと向いました。

四、五隻ぐらいのはしけだったと思いましたが、はしけの上は人、人であふれており座るのがやつとでしたが、すぐ船酔いして身をかがめ横になっておりました。やがてソ連の戦闘機に見つけられ、空からの機銃掃射に逃げも隠れも出来ず船底へも入れず恐ろしさに身をちぢめ、もう絶体絶命かと思っていたとき、ドボンと爆弾投下、はけしは大きく傾き、頭から波をかぶり何も考える余裕もない無感動だが少しづつ浮き上がってきた。「助

かった。助かったのね」と皆んなは、手を取り合い喜んでおりましたが、私は恐怖と緊張と船酔いですぐに起き上がることは出来なかった。

やっとの思いで夕暮れ真岡港に着き収容され、衣類を乾かしその夜は教室で休みました。ところが翌朝早く、ドンドンと大砲の地響きに学校は大騒ぎ、母に早く外へ出なさいとせき立てられ学校の裏手の方に出て母を待ったが、幾らまっても姿は見えません。なりやまぬ海からの艦砲射撃と空からの機銃掃射、危険な状態に皆んな豊原へ向うべき山越えを始めました。私達姉妹は迷いました。「真岡の町は火の海なのよ」の言葉に、皆んなの後へ続きました。

けれど登りつめて見ると、道らしき道などありません。大きな木が倒れていたり岩があり穴があったりして大変な道程でした。昼は敵機に見つかるので、夕暮か夜は月明かりで小川に差しかかると首に巻いたタオルで顔をうるおし、目をこすりながらの恐怖と疲労の苦しい逃避行でした。

何日かたって誘導されるまま豊原の劇場へと案内され

ました。顔なじみの人達がたくさんおりました。そして二日後、親戚の叔父さんが少しくらいの衣類ならあるから家へ行きましよう、尋ねて来て下さいました。

妹達を劇場に残し叔父さんの家へと急ぎました。駅前を通ったのですが、大勢の引揚者が汽車を待つておりました。叔父さんの家は町外れにあり、挨拶をして間もなく、ヒュウドカンと音がして慌てて外へ出て見ると、駅の周辺が爆破されたのか、真赤な炎が上っており妹達のことになり、走り出しておりました。少し走った所で、バラバラという銃声にこれは危ないと思い、近くの防空壕に飛び込んだ。

ふとん袋が一個置いてあった。その陰に隠れていたら、戸口からスワーと風がはいつてきて思わずハッとした。弱い爆風だったようだ。ここにも危ないと思ひ防空壕から出て見るとあたりは火の海、慌てて飛びだし叔父さんの家に戻り、夕方になって叔父さんと妹達を迎えに行きましたが、駅前には焼野原になっており、あの大勢の人達はどうしたのかと案じながら、妹達を連れ叔父さんのお家でお世話になることになり、夕食後皆さんが

集まっている小高い丘に登って見ると駅周辺はまったくぶっていた。

ところどころがもえていて明るかった。その中何台ものトラックが何かを運んでいる。近くまで見に行ったらの話によると、駅前の引揚げ者達は、一瞬にして真っ黒な死体が折り重なり屍体の山で埋もれてしまったそうです。辛うじて助かった人も必死で逃げまどい、背負っていた子供や赤ちゃんをおろして見ると、火傷をしていたり首がなかったとか、それを聞いたとき何んと惨い事を、と無抵抗の引揚者に浴びせた容赦ない砲撃、あまりにも残酷だ。

戦争は、悲惨な生地獄です。

## 私の樺太居住のすべて

北海道 村上 善徳

明治四十年父母が開拓農民として富山県香城寺より南樺太泊居郡名寄村に入植し荒地を開拓し相当苦勞したよ